

新疆コムルのイスラム公国

——哈密郡王領の歴史——

佐 口 透

序

コムル（哈密）の近世を政治史的に見れば、チャガタイ-ハン家の一後裔である Unashiri 王を始祖とするモンゴル=仏教的コムル王朝の時代（15世紀）にはじまり、17世紀初頭からは Sa'id Khan の後裔による Moghuliyya 系のイスラム的コムル政権の時代となり、その政治的分裂と期を同じくして17世紀80年代からジュンガルのコムル侵略とこれに対抗する清朝勢力の進出の時代となった。これに対応して成立したのが近代コムルの地方政権であった。

1 近代コムルの形成

コムル城を中心とする東部天山南麓地方の内部事情がやや知られてくるのは18世紀の初頭からであり、つまり、ジュンガル勢力の南進に備えた清朝の政治的、軍事的関心がこの地方に向けられた時期にあたる。17世紀末に「哈密（Hami）回子の拠る哈密城」が存在していたのは明らかであり、哈密達爾漢伯克（Hami Darqan Bek）の称号を持つ額貝都拉（'Ubaid-Allah）なる人物がコムルの土着の政治的代表者として清朝史料に突如その姿を現わしたのがコムル近代史のはじまりである。

18世紀初頭の史料と推定される『重修肅州新志』の一部をなす『西陲全冊』によると、甘肅の柳溝から哈密に至る路程上の主要城村が記載されており、そのなかで甘肅と哈密地方との境界上の星星

峽から西北方へ紅柳園、苦水、隔子烟墩、長流水、黄蘆岡を経て哈密に至るコムル地方東半部の主な邑落が知られる。『西陲全冊』によると、当時の「哈密城は平川に位置し、城の周囲は3、4里で、南北の2門がある。また、哈密城の東に河があり、河上に橋があり、水磨がある。また、哈密城の北〔西か〕に速ト哈刺灰 (*Su-pu Qaraqoi*) があり、南30里に畏兀兒把力 (*Uyghur Balıq*) 城があり、西40里に阿斯塔納 (*Astana*) 城があり、城北10里にト克兒 (*Bügür* ?) があった」と記している。この記事は16世紀前半期の史料『西域土地人物略』に記されている哈密城とその近傍の邑落名を引用したらしいことは両史料を比較すればわかる。しかし、『西陲全冊』は上記の記事につづいて、「現在、調査した結果では、哈密は従前は土築の旧城であって、城内に数千戸が居住し、俱に回子 (*Muslim*) の耕種する地畝であり、糧食によって生活している。該城〔哈密〕には共に〔従属する〕五城がある。一つは蘇門哈爾灰 (*Su-men Qaraqoi*)、一つは阿薩塔納 (*Astana*)、一つは托和斉 (*Toghochi*)、一つは納布斉 (*Na-pu-ch'i*)、一つは喀刺托博克 (*Qara T'o-po-k'ö < Qara Döbä*) という。各城内に約100余家が居住し、俱に耕種して生計をたてる。その北山は巴里坤 (*Barkul*) といい、東山を渾納秦 (*T'an-na-ch'in*) といい、探納沁 (*T'an-na-ch'in < Tarnachin*, 塔勒納沁) ともいう」と述べる。以上のなかで、托和斉は『西域土地人物略』の鉢和寺 (*Po-ho-ssu*) に、納布斉は刺木 (*Lamu, Nam*) に、喀刺托博克は哈刺帖乚 (*Qara Döbä*) にそれぞれ対応しているから、畏兀兒把力 (*Uyghur Balıq*) を除くコムル城西方の邑落5城は明代中期からはほぼ同じ名称を保持していたことがわかる。以上見たように、18世紀初頭のコムル城は周囲が3~4里で、南北の2門があったが、この城市は13世紀後半の *Camul*、元末明初以来の合迷里 (*Khamil*)、哈密城であろうし、16世紀中期以降の *Moghuliyya* 系イスラム王朝一門の *khan, sultān* たちが根拠地とした哈密城に他ならない。⁽³⁾ 上文にコムルの土築の旧城というのが元朝以降のコムル城であったと見られる。

1679—82年の間にジュンガルの君主 *Galdan* は東トルキスタン

(回部)の主要なオアシス地区を服属させたが、コムル地方もその支配下にはいって貢納の徴発をうけた。1696(康熙35)年に、コムル回子の頭目として登場した‘Ubaid-Allah Bek はジュンガルに服属して *darqan bek* (特権官人)の称号を持っていたが、Gal-dan の没落を機に清朝に臣従を申し入れ、1697(康熙36)年に内附し、清朝は‘Ubaid-Allah Bek の部民を旗に編成し、かれを部長に任命し、哈密国王印と紅纛を給し、さらに頭等扎薩克の爵位を与えた⁽⁴⁾。1715(康熙54)年にジュンガルの君主 Tsevang Araptan がコムルに侵攻し、清朝軍が反撃してこれを占領し、次いで、「旧城の外に新城を建築した(『西陲全冊』)」と伝えられる。後年の記録を参照して見ると、ここに言う「新城」とは占領者清朝が新たに造築した城塞であり、従って「旧城」とは歴史上のコムル城であり、のちに回城と呼ばれるものである。ただし、「新城」は実際は1727年に造築された(後述)。なお、‘Ubaid-Allah Bek が清朝皇帝の派遣した土木職人の協力をうけてイスラム暦1118(西暦1706)年にコムル城を修築したことを記念するアラブ字テュルク語石碑が存在しているが、これは18世紀初頭のコムル城に関する一つの記念物である。‘Ubaid-Allah の子の郭帕伯克(Kuo-pa<*Kopa Bek, Wāpā Bek 1709—11)⁽⁶⁾以下、9代の子孫は哈密王位を継承した。コムル回城はこの王家の宮殿(*orda*)と廟墓(*mazār*)の所在地として20世紀前半期まで存続した。

‘Ubaid-Allah Bek の出身と家系に関しては扱べき史料は乏しい。1640—50年代にトルファン、コムルを支配していた Moghuliyya 系トルファン-ハン家の最後の君主 ‘Abd al-Rashid Khan II (1680—96) はすでにジュンガル支配者によって地位を奪われ、その後、コムル地方に Moghuliyya 王朝の後裔と見られる王公は見当らない。さて、陶保廉の『辛卯侍行記』巻6はコムルの土着民と王家について、「[明朝の記録に伝えられる] 哈刺灰(Qaraqoi), 畏兀兒(Uyghur) [という種族] 名は [この地方では] ほとんどなくなり、[現在の] 哈密人は纏頭回と通称している。旧説として、明代の末に哈密の君主が葉爾羌(Yarkand)から来たとか、元朝の後

裔であるとか、あるいは回回であるとかいわれているが、末だことごとく信ずることはできない。額貝都拉は畏兀児種の人で、蒙古でも回 (Muslim) でもない。その先祖は4世まで溯るが、葉爾羌に居たという形跡はない」と述べているのが注目される。‘Ubaid-Allah が Uyghur 種であって、Muslim でも Mongol でもないというのは混乱した見解であって、実際はかれは Muslim Turkī であったと見られる。‘Ubaid-Allah が Yarkand から来たという説は根拠に乏しいと陶保廉は考えており、かれはこれについて次のように注釈をつけている。——「わたしの父〔新疆巡撫陶模〕は哈密王の世系が葉爾羌より移住して来たのか、明末の各部族が現在に至るまでの区別の実情はどうであったのかを〔哈密王に〕手紙で問い合わせたことがあった。哈密王の返事の手紙によると、額貝都拉は清朝から封ぜられた始祖であり、額貝都拉の高祖は伊薩敏 (‘Īsa Min), 曾祖は博啓 (Po-chi), 祖は黙黙特雅爾 (Muḥammad Yār), 父は黙黙特夏 (Muḥammad Hsia) であり、かれの4世の祖は皆、伯克 (bek) であったが、これ以上の資料はない。しかし、祖先が明朝の末に葉爾羌より移住したという話は聞いていない」と。これは注目すべき説である。‘Ubaid-Allah の父といわれる黙黙特夏 (Muḥammad Hsia) は前述の「A.D. 1706年の Qomul 城修築記念碑文」に‘Ubaid-Allah の父といわれている Abū’l-Naṣr Muḥammad Shāhī Bek に当ると見られるから、この人物の存在は確実のようである。⁽⁸⁾しかし、他の人物については史料上から未確認である。もし、‘Ubaid-Allah が葉爾羌から来たのではないとすれば、この家系はコムル地方の土着人であったことになろう。かれが土着の豪族あるいは bek 身分の人であったのか、あるいは新興の実力者であったのか、それともイスラムの聖職者出身であったのか、史料上では知り得ない。しかし、かれが17世紀末のジュンガルの侵入時にコムル地方の唯一の政治的代表者としてジュンガルに従属し、ついで清朝に臣従し、その東トルキスタン征服に協力し、その功績によってコムル地方の領主に叙任され、清朝支配下の新疆回部における特別の地位を占めるに至ったことは明らかであり、これが近代コムル王家

の成立過程であった。

1709 (康熙48) 年に 'Uбайд-Allah Bek は死んで、子の K'o-pa (郭帕 1709—11) が継承し、ついで Āmīn (額敏 1711—36), Yūsuf (玉素ト 1736—63) がコムル王となった。とくに、Yūsuf は清朝の準部、回部平定の作戦に参加し、功績があったことから貝勒、郡王に進封された。1760年に清朝は東トルキスタン (回部) を支配下においたのち、伯克⁽⁹⁾ (*bek*) 官人制を布いて土着の回子 (*Turkī, Chantō*) を統治させたが⁽⁸⁾、1732年から1759年にかけてトルファン地区に成立した吐魯番郡王と並んで哈密郡王は清朝皇帝の忠誠な臣下として新疆回部にそれぞれ半独立の公国を維持することとなった。Yūsuf のあとを嗣いだ Iṣḥāq (伊薩克 1763—80), Ardāshīr (額爾德錫爾 1780—1813) の時代までは清朝の回部統治の安定していた時期であって、そのなかでコムル公国の社会も表面上は平穩であった。

漢字で哈密 (Ha-mi) と写されるこの地名はトルコ語形では Qo-mul と呼ばれているが、中国文献では明朝初期より哈密という漢字名が一貫して使用されている。13世紀には Marco Polo はこの地名を Camul と写しており、Camul から Qōmul という語形が生じたと見られている。さらに Camul の語源は推定形 Qamīl (哈密里) であると見られるが、この Qamīl という語形から哈密という漢訳名⁽¹¹⁾ ができたと推定されている。『辛卯侍行記』巻6によると、「哈密の二字は蒙古語であって、今、纏回 (Ch'an-hui) はすでに久しく哈木耳卑部と呼び、回族の公用書類を用い、回字〔アラブ字〕を用いている……⁽¹²⁾」といい、また、「纏回が哈密を呼ぶには皆、哈木耳 (Ha-mu-er) といい、あるいは庫木耳 (K'u-mu-er) と呼ぶ」と述べている。哈密はこの当時、トルコ語形で Qamul, Qōmul と呼ばれていたのである。なお、コムル土着人は Qomulluq (コムル地方民) と自称したが、漢語形の Hami (Khami) も19世紀中期以後、ロシア、ヨーロッパ人によって広く用いられている。

コムル城の実状は18世紀後半より漸く知られてくる。『西域図志』巻9によると、「哈密の城市は二つあり、その旧城は周囲が4里で、東門と北門とがあり、康熙56 (1717) 年建てられた〔修築の意〕。城

東に川〔Ayar 川か〕があり、西南へ流れる。新城は雍正 5 年 (1727) 建てられ、周囲は 1 里ばかりで、東西北の 3 門があり、官兵駐防の所である」というのが 1760-80 年代の公式記事であった。しかし、この「旧城」と「新城」に関する記事は説明が不十分である。やや後代の『回疆通志』巻 11 (1804 年編纂) によると、「康熙 54 年、策妄喇卜坦が反逆して、哈密に侵擾したので、清朝は軍を出して征討した。雍正 5 年 (1727)、旧回城の北に土城一座を建築した。周囲は 1 里 8 分あまり、高さは 2 丈 4 尺 6 寸、厚さは 9 尺 4 寸で、東西北の 3 門と、城楼が各門に 1 座ある」というのによると、歴史的 Qomul 城の北 (実は東北) 隣に、1727 年に土城が築かれたのであり、これが旧城 (回城) に対する「新城」(『西域図志]) であった。この新城は清朝の統治機関が駐在した哈密城であって、しだいに漢城と呼ばれるようになった。また、この地方の土着の政治的支配者が明朝初期から首都としたコムル城 (旧城) は清朝治下で哈密回城と呼ばれることになった。1780 年ころの著述と見られる椿園七十一『西域聞見録』巻 1 には「〔哈密〕城の西 5 里余は即ち哈密回城であり、その王を伊薩克 (Ishāq 1763-80) という」とあり、「哈密城」とは別に回城を明記している。『回疆通志』巻 11 の別の箇条によると、「〔哈密〕城の西南 3 里ばかりに、旧回城 1 座があり、〔哈密〕郡王銜貝勒額爾德錫爾 (Ardāshīr 1780-1813) 及び所属の回人の居住する所であり、自らの土地を耕作する五堡の回人を管轄し、〔清朝への〕賦税はまったくない」と記しているのは、自治領としてのコムル公国の性格を適確に観察したものといえる。コムル人の口碑によれば、コムル漢城は *Khitay-ning shāhri* と呼ばれ、回城は *Chong Qomul* (大コムル) と呼ばれることがあったようである。⁽¹³⁾

コムル城の管轄下の城村は哈密属と呼ばれ、コムル城の東方では Tarnachin、西方では Qara Döbä、東南方では星星峽、南方では砂漠、北は天山にそれぞれ至る地域であったと総括されている。⁽¹⁴⁾ 別の史料で言えば、コムル城を中心として、東南方では中国甘肅境界上の星星峽、西では七角井地区まで、その西はトルファン王領とな

り、また、北は Barkul 山脈、Qarlīq Tagh 地区で Barkul (巴里坤、鎮西)の管区と接していた。⁽¹⁵⁾ 哈密属あるいはコムル地方というのはコムル人 (Qomulluq) の歴史的な生活圏を指すものであると同時に、哈密城に駐在する清朝の哈密辦事大臣とその駐屯兵の管轄下の地方であった。

1907年にフィンランドの政治家探検家 C. G. Mannerheim がコムルを訪れてこの地方の地誌について調査した。これによると、コムル城から東南方、安西への方面には Ajar (Ayar と読む。阿雅爾), I-koshuor (Qarmuqchi), Huang-lung kang (黃蘆岡), Chang-liu shui (長流水), Yen-tun (烟墩), Hsing-hsing hsia (星星峽) (以上、戸口は285戸)、西北方では Sumkargo, Astana, Erhpu (Toghochā), Lapchuk, Qara Döbä, Sanpu, Taranchi (合計516戸)、東北方では Barkul 道路上の Hotentam, Bagdash, 南方では Gol Uljen 河畔の Shanga (合計415戸) などを挙げていて、⁽¹⁶⁾ 新しい地名も出ているが、全体としては前代とは大きな変動はない。その他に、コムル城の東北約 40km の廟兒溝、東山地区、沁城 (塔勒納沁の城塞。トルコ語名で Tash Bulaq) などもコムル地方の邑落として知られていた。⁽¹⁷⁾ とくにこの東山には Qomul の *taghchi* (山の人々) とか *tagh-ning adam* (山の人々) と呼ばれる山地民が住んでおり、馬、鹿、羊、駱駝を飼い、勇敢な人たちであって、1863年にドンガン部隊がコムルを攻撃したとき、これらの山地民はコムル王の軍隊に参加して反攻したという。⁽¹⁸⁾ これらの山地民が13-14世紀の元朝時代に、さらに15-16世紀の明朝時代にコムルの北山 (Qarlīq Tagh か) にいたという Mekrit (セ克力) 族と関連があったかどうか検討に値しよう。⁽¹⁹⁾

‘Ubaid-Allah 家のコムル郡王はコムル回城を王城とし、六つの回城 (ムスリム城邑) を直接支配したが、この属邑の数を13とする記事もある (『新疆識略』巻3)。この六つの属邑に関し、椿園七十一は「郡王所轄の回城は六つで、Hami, *Su-mu* Qaraqoi, Astana, Toghachi (Toghochi), La-chu-ch’u-k’o (<Lapchuq), Qara Döbä である。すべての回戸はみな、Iṣḥāq 王の *albatu* (アラ巴図。奴)

である。戸は寡弱で2,000に満たず、家は皆貧寒であって自給できない。言葉は外部各地の回とは通じない。衣服は似ているが、ただし、帽子は円く、翅は短い。夏は極めて暑く、冬は極めて寒い。地方の産物は大麦、小麦、穀糜、瓜、蒲桃である。北は Bar-kul で、南〔西か?〕は Pichan と界している」と述べているが、これはコムルの地誌、文化などに関する適確な記事である。さらに、「*Su-mu Qaraqoi* は頭堡と呼ばれ、Astana は二堡、Toghochi は三堡、Lapchuq は四堡、Qara Döbä は五堡とそれぞれ呼ばれた（『西域聞見録』巻1）」。それらの地名は漢語であるから、これは中国統治の所産であろう。

五堡の起源と性格については若干の問題がある。たとえば、謝彬の調査によると、「蘇木哈喇灰は明代の哈喇灰（Qara Qoi ~ Qaraqoi）人が曾って住んだところであり、阿斯塔納は〔イスラム〕先賢の聖墓をいうのであり、托哈齊の回教堂の傍らに回教徒の塚が幾重にもあり、その上部に後円形の建物（円屋根）⁽²⁰⁾を覆うてあり、拉布楚克には明代の刺木城の遺址がある」という。Qara Qoi は「黒羊」を意味するトルコ系種族名であり、Astana と Toghochi は共にイスラムの聖所の所在地であり、Lapchuq は明代の刺木城と関係づけられているのが注目される。*Su-mu* は上述のように *su-pu* と読まれることがあるが、「*su-mu* は部落の意で、Qaraqoi 人の住地であったので *Su-mu Qaraqoi* と呼ばれたという説がある（『辛卯侍行記』巻6）」。 *Su-mu Qaraqoi* は Sumkāgo (A. Stein, *Innermost Asia*), Sumkarga (C. G. Mannerheim 1940), Shüm-Qārg’hō (A. v. Le Coq 1918-19) などという異音訳でも伝えられている。Qaraqoi 人は明代からコムル城に住んでいたようである。⁽²¹⁾ *Su-mu Qaraqoi* の語義を「Qaraqoi の部落」と見れば、*su-mu* はモンゴル語の *sümiin* (寺院) と解され、明代に Qaraqoi 人の仏寺かその集落があったことに由来すると推測できよう。しかし、明代の速ト (*su-pu* ~ *su-mu*) が *su-mu* (*sümiin*, 仏寺) の異音訳といえるか確実ではない。⁽²²⁾ コムル人の口碑によると、上記の「6 yurt (地方) はコムル人によって *Shārlīq* (<Shāhrlīg) と呼ばれ、この地方の民衆は〔コ

ムル王] の *alwānchi* (<*albanchi*, 貢納民) と呼ばれていた」ことを知る。⁽²³⁾

コムル6城の他に、コムル人の主な邑落として、Toghochi の東に Taranchi (付近に三道嶺がある)、また、Toghochi の北の Jigda などがあ⁽²⁴⁾る。コムル人の主な住地、とくにコムル王が直轄したという五堡すなわち *Shārliq* がコムル城の西部地区に存在していたことが注目される。これは Jigda 及び五堡の地区にイスラムの *buzur-gvān* (聖所) があ⁽²⁵⁾ったということに関連があるかもしれない。

19世紀になると、コムルに関する情報はやや具体的になり、地域社会の諸様相も知られるようになった。たとえば、鴉片戦争惹起の責任を問われ、新疆伊犁へ謫戍させられた林則徐は甘肅からの旅程の途上にコムルに立ちより、見聞記を残した。

〔道光22年/1842〕8月23日、一行は哈密城に到着した。……今、その土地は潤い、泉は甘い。田は多く、樹は繁茂し、楽土というべきである。ただ、田は回民の耕種に帰していて、その税糧を回王に納め、満漢の官民は皆、〔哈密王の行政に〕関係していない。土城〔漢城〕は甚だ小さく……その回城はこの城から約5里距てており、回王府がある。城内及び附近の回民〔哈密人〕は約万余戸で、男は印花小帽を頭に戴き、女は紅衣を着ている。土人はかれらを纏頭と呼ぶ。かれらの言語は中国語と大いに異なるが、しかし、中国語を能くする者もまた多い。この地から西南はたいていは皆、回地である。……25日、〔漢城の〕東関より出発して……回城を通過した。城内にはいって一覽すると、その王府は高く城の頂きに出ている。回王の名は百善〔伯錫爾, Bāshir 1813-67にあたる〕であると聞いた。かれはこの地に封ぜられて40余年〔?〕である。……30里行くと一つの土居があり、……また40里行くと頭堡で、土城が⁽²⁶⁾あり、城内の回民は百余戸である。……二堡、三堡がある。

この見聞記は1842年に、たまたま、林則徐という高級官人が通過したコムル城の観察であって、トルコ=イスラム社会について十分な知識がなく、約2日間の滞在中にコムルの清朝の官人から聴取した

話をまとめたものと思われるが、しかし、その情報は他の史料と比較してみても充実している。

すでに述べたように、1727年に清朝は周囲1里余の漢城を築いてよりのち、コムル城は回城と漢城の並立となった。ついで、新疆のドンガンの大乱の間、清朝当局は1868（同治7）年に漢城の西北壁に連結した新城を建てた。1885（光緒11）年に、清朝当局は戦災を受けた漢城を重築し、これを周囲3里半に拡大し、城の西北部から新城の南門と接続させた。新城は巡検の治所となり、城北に漢人数十家、陝甘の寄留回民二百余家がいたといわれる⁽²⁷⁾。このようにして、回城、漢城（老城ともいわれた）、新城の三つがコムル3城と称せられることになった。

19世紀末のコムル3城に関して『哈密直隸州郷土志』はかなり詳しい説明をしている。——「哈密の漢城は老城ともいい、旧時の城址は周囲が1里3分で、東西2門がある。……光緒12年（1886）に城を拡張し、周囲は3里5分となり、城壁の高さは2丈5尺、門は四つで、各門に城楼を建て、月城〔甕城ともいう〕を築いた。……城内に商人はおらず、商品陳列台に居民が十余戸いる。新城は漢城の西北隅から3里にあり、同治7年（1868）修築した。周囲は1里6分、高さは2丈、巾は1丈4尺で、東南北の3門がある。城内には漢人と回が雑処している。東西両側の附郭は厳然と3城と連なっている。行商はいるが、店舗を置く商人はいない。漢城から新城に至る間は街道が相接している。貿易〔場〕はともに城外にある。回城は漢城の西南隅から4里ばかりのところであり、周囲は4里6分、高さは2丈6尺、巾は3丈、東北の2門がある。北門よりはいると、内部に層台を築いていて、〔コムル〕王府がある。城中にはまた商人はおらず、居民は耕作を以て生業としていて、郷村と異なる⁽²⁸⁾ところはない」。この記事はドンガンの戦乱後、周囲3里5分に拡張された漢城（老城ともいう）、これより大きい回城と最も小さい新城の規模とそれらの内部について述べたものである。この3城の平面図は20世紀はじめに C. G. Mannerheim が作製したものが簡単ながら記録された唯一のものといえよう（C. G. Mannerheim 1940）。

コムル人の人口については種々の統計数字がある。回城と *Shārliq*（五堡）及び各所のコムル人の人口は18世紀後半期の史料には2,000戸（『西域聞見録』巻1）とあり、19世紀初頭の統計として1,950余戸（『新疆識略』巻3）と伝えられている。19世紀前期の地誌『哈密志』巻51によれば、戸口冊に登録されたコムル五堡と各処のコムル人の戸口は1,950戸、人口は12,600余人としている。陶保廉によれば、「コムル回城の中の纏回は100余戸であるが、コムルの民は12蘇木（*sumu*）に分かれ、男女あわせて6,200余人であるという（『辛卯侍行記』巻6）」⁽²⁹⁾。また、20世紀初頭の統計として、漢人が594戸（2,873人）、回戸490戸（1,349人）で、纏民親王〔コムル王〕の直轄の人口は不明であるという（宋伯魯『新疆建置志』巻1）。また、中華民国時代の資料の一つには「哈密県の人口として、纏回（コムル人）が約2,000戸、漢民が約1,000戸、漢回（現在の回族）が約550戸」という調査もある（林競『西北叢編』1933年）。これら各種の統計数字には極端な差異はない。1907年の C. G. Mannerheim の調査によると、「コムル諸城の人口は *bazār* と老城〔共に漢人人口〕とでは約1,500戸、回城では400戸くらいである。城内、村落ともに1戸は5～6人と見積られる。しかし、山中では大人は1戸で3～4人くらいである。この計算の基礎が正しければ、全人口は18,000人以上となろう。その大多数は Sart 人〔纏回、コムル人を指す語〕である……」と述べている。この資料では確実なことは分らないが、回城の400戸をふくめてコムル人の人口は10,000人以上であったと見られ、以上、すべての資料を総合してコムル人の戸口を2,000戸以上、人口を12,000～15,000人を計算する資料が多い。

2 回城とイスラム

コムル王 Bāshir（伯錫爾 1813-67）の治世は長く、その前半期は安泰であったが、1862年秋に、陝甘新疆のイスラム教徒（ドンガンと纏回）の大動乱がおり、コムルは1864年から戦火に巻きこまれた。コムル王は清朝側に立ち、1864（同治3）年には灌漑工事による軍糧の提供につとめたことによって親王待遇となり、Ch'in-

wang Khwajam と呼ばれ、哈密幫辦大臣の職務にもついた。⁽³⁰⁾ コムル、バルクルの漢回（ドンガン）とイリ、クチャの纏回（現代の維吾爾人）はコムル地方へ幾度も進軍し、1866（同治5）年、親王 Bāshir は応戦して敗れて捕虜となり、翌1867年に賊を罵ったため殺され、清朝はかれの子、Muḥammad（邁哈默特 1867-81）に王爵⁽³¹⁾を継がせた。ドンガンの反乱に際しては、コムル王家はイスラム教徒でありながら、清朝に忠誠をつくし、イスラム勢力と戦ったので、反乱勢力側から敵として非難された⁽³²⁾。さらに1873（同治12）年にコムル城は陝西の回民頭目白彦虎の攻撃をうけ、コムル王 Muḥammad は捕虜となって西方へ連れ去られ、王母の邁哩巴鈕（Mailibachu）も賊に捕えられたが、1877（光緒3）年、温宿（Aqsū）より脱出してコムルに帰った⁽³³⁾。ドンガンの動乱によってコムルはしばしば反乱軍の侵入をうけたが、王家じたいは清朝によってさらに厚遇された。しかし、コムル城周辺は新疆奪回を計る左宗棠、劉錦棠の軍隊の兵站基地となり、これに伴って清朝の商人も進出してきて商業活動を強め、新疆経営に関心を持つ清朝の官人、武人などのコムルを訪れる者が多くなった。

1881（光緒7）年にコムル王 Muḥammad は死んだが子がいなかったので、王家は族人の Shah Maqṣūd（沙木胡索特 1881-1930）を後嗣に立てようと計った。G. E. Grum-Grzhimajlo によると、「Muḥammad が死んだあと、嫡男子がいなかったので、かれの母〔Bāshir の夫人 Mailibachu〕は自分の娘を Shah Maqṣūd に与えて婿とし、清朝当局に贈賄してコムル王位の継承を承認させることに成功した。嫡男子がいないとコムル王家は断絶する恐れがあったのである。Shah Maqṣūd はその後、北京に入覲して数年間滞在し、このようにしてコムル王家の存続と安泰を計った。Shah Maqṣūd は *aq-suyok*（白骨）⁽³⁴⁾ 出身であったとか、少年時代に羊飼いであったとかいわれている」。清朝側の史料によると、1882（光緒8）年に「故哈密扎薩克親王邁哈默特の入継の子〔養子の意〕沙瓜胡索特（Shah Maqṣūd）を以て襲爵させた⁽³⁵⁾」とあり、G. E. Grum-Grzhimajlo の報道を確認させる。なお、1884年の新疆省制施行後

もコムル王は原則としてその地位と支配権を維持することができた。Shah Maqşūd の在位時期は19世紀の末から20世紀の20年代にあたり、この時期に数多くの外国人が探検、調査などの目的を持ってコムルを訪れ、そのほとんどすべては Shah Maqşūd が東トルキスタンのイスラム君主であるとの認識のもとでかれに面会を求めた。

1877年、東トルキスタン横断の旅の途中コムルを経由した探検家 F. Younghusband はコムルについてはその原住民の城市、漢人の城市⁽³⁶⁾と古い寺院の廃墟について極めて簡単にしか報告していない。G. E. Grum-Grzhimajlo は Shah Maqşūd に面会できたかどうか不明であるが、「Shah Maqşūd はつまらない人物で、けちで、不誠実な、軽蔑すべき暴君であった⁽³⁷⁾」と評している。A. v. Le Coq は1905年8月に、トルファンよりコムルを訪れ、Shah Maqşūd に会見することに成功した。A. v. Le Coq は王宮、王家の廟墓、石碑などを観察、調査し、Maqşūd 王が「ひどく愛嬌がよく、上品で利巧で……我々のために乾杯したが……写真はとらせなかった⁽³⁸⁾」と伝えている。かれはコムル王に面会した最初のヨーロッパ人であったかもしれない。大谷探検隊員渡辺哲信は1903（明治36）年11月1日にコムルに到着、哈密王爺（哈密王を指す）と連絡をつけ、「翌2日午前、哈密王が来訪したが、〔かれは〕色白く、眉秀で、鼻隆く、両頬は豊かに垂れ、インド貴族の風があり、多分、46歳と思われた」こと、11月3日に「哈密王の娘を娶るために来た柳中（魯克沁、Lükchüing）城の王爺〔吐魯番郡王〕が哈密王を訪問するため来た⁽³⁹⁾」ことを伝えている。

C. G. Mannerheim は1907年10月27～30日、コムルに滞在中、Shao Makhmut〔Shah Maqşūd〕をその王宮に訪ねて、その印象をこう記している。——「王は中国風の服装をし、中背で腰がひじょうに曲っていた。かれは北京で生活したためか、中国の官人風に染まっていた。かれは微笑とひじょうな丁寧さにも拘わらず、追従と臆病さを示し、……なにかいやなものを感じさせられた。かれの養子〔実は娘の婿の意〕は Lükchüing にいる⁽⁴⁰⁾」と述べている。

1912（明治45）年、大谷探検隊員橘瑞超はコムルに到着し、回城にいた「哈密土族王のチンガンホジャムを王宮に訪問した。かれは異教徒たる支那人を妻としていた」ことなどを伝えている。チンガンホジャムとは親王和卓木（Ch'in-wang Khwajam）の訛で、当時のコムル王に対する通称であった。また、大谷探検隊員吉川小一郎も1912年3月8日に回部親王沙木胡索特と王宮内で会見した。⁽⁴²⁾1916（民国5）年に林競はコムル回王と面会し、かれには1男1女があり、娘はLükchüng王に嫁したこと、王は曾って北京にいたとき、漢人の女を娶ったが、今は彼女は寵を失ったこと、本来の夫人がなおいること、王は今年〔1916年〕70歳余で、精神は健全で、よく漢語を操ること、中央政府に対してなお恭順を称していることなどを伝えている。⁽⁴³⁾また、謝彬によると、「コムル王は極めて壮健で（1916年現在で60歳余）、性格はなごやかで、能く漢語を操る」と似たような見聞をしている。S. Hedinは1928年にコムルを訪れ、「Shah Maqşūdは沙親王と呼ばれ、よく肥えた小柄な紳士で70歳である。部下からはPadishahと呼ばれ、東トルコ語を使った」と述べ、また、「Maqşūdには20歳の息子 Naşir〔聶滋爾 Nieh-tzu-er〕がいる」⁽⁴⁶⁾と伝えている。

以上のように数名の外国人探検家がコムル王 Maqşūd に面会したのは、コムルが中国本土と隣接する東トルキスタン最東部の要地であったこと、そこに公国があって、その王家と領民がトルコ語族、イスラム教徒であったことが関心を惹いたからであろう。1930年に Shah Maqşūd が死んで、子の Naşir（聶滋爾）を残した。1931年に馬仲英が戦乱をおこし、コムル城も戦火をうけたが、1933年に中華民国司法行政部長の羅文幹とその一行は新疆視察の途次、コムルを訪れ、回王聶滋爾らと会見した。羅文幹の一行はコムルに3城があり、山間に住むコムル人もかなり多かったこと、回王に見舞金1,000元を与えたことを伝えている。回王の職銜は「哈密地方を管理する蒙古鑲紅回旗の世襲替りなき頭等扎薩克雙親王」と伝えられている。⁽⁴⁷⁾聶滋爾は王位を継承しようと希望したが、コムル人の中に反対する者もあったという。

トルコ=イスラム社会という点において、コムル回城とイスラム文化が注目される。G. E. Grum-Grzhimajlo は1889-90年にコムルに滞在し、回城についてはじめて報告した。これによると、「老城〔漠城〕の南西、トルファン街道の南に位置する回城は大きくはなく、古くて、ひびのはいった、あちこちすでに崩れ落ちた城壁に囲まれており、狭い袋小路で分たれた建物で満ち溢れ、庭園もたくさんある。Wang〔コムル王〕の *orda* (宮殿) は回城の北門の傍にある。これは2階建てで、その一方の側は城壁にもたれかかっており、その上に、傍屋でふさがった内庭がそびえている。そのなかに *yamen* (衙門)⁽⁴⁸⁾、附属の納屋、物置きなどがまじっている。ここに大堂がある」と述べているのは、回城の実状報告としては最も古いものであろう。同じころ (1891年)、陶保廉はウルムチへの旅の途中、コムルへ立ちより、回城にはいってコムル王をめぐるイスラムの様相を観察した。これによると、「王府は回城西門内の大きな丘の上にあり、極めて高所にある。城内の纏回〔コムル人〕は百余戸であり、深目高鼻で、言葉は〔トルコ語なので〕まったく意味不明であり、文字〔アラブ字〕は横書きである。円い帽子をかぶり、皮革の靴をはいている。眺めているうちに、かれらはヨーロッパ人ではないかと疑われるほどである。……かれらは回鶻であって次第に⁽⁴⁹⁾変化した者であろう」と述べている。陶保廉の観察は中国知識人としてはすぐれているといえよう。同じころの文筆家蕭雄の『聽園西疆雜述詩』巻2によると、「王府は回城の東隅〔?〕に在り、牆を附し、台を築き、高く城の上に出ている。頭門、二門の内にある正宅は三層で、皆、平地にある。宅の右は即ち十段の登台で、台上の屋舎は廻環し、懸牕〔かかり窓〕より下瞰すれば内院がある。宅の左の長廊を歩み、さらに一門を進むと園林がある。亭台数座あり、果樹が叢雑している。……このあたりは内地の風景さながらである。……以前は王宮は実に華麗であったが、同治3年より、戦乱に遭って焼かれた……」という。これは作者が実際に見たコムル王宮の規模と景観の一端を示しているといえよう。

C. G. Mannerheim は1907年10月にコムルを訪れ、コムル城につ

いても観察した。それによると、「老城と呼ばれる漢城は中国人の城塞である。河の対岸で西へ三分の一 mile の地にムスリムの古い城と王の宮殿があり、それは無数の四角の突起物〔甕城をさす〕のついた荒廃した古い城壁で囲まれている」と記す。かれは別の箇所⁽⁵⁰⁾で回城をこう記している。——「回城すなわち Sart 城は無数の突起物の形を持つ城壁で囲まれている。王の *yamen* の近くの最大の高さは 9 fathom [11.47m にあたる] である。……回城は銃眼のついた胸牆を持つが、塁壁は狭く見え、私は上り坂が見えなかった。城壁内の空間は人口が密で、交通は困難である。西北方面には王家の諸王の廟墓を含む建物の大群がある……」⁽⁵¹⁾と。これは城壁に重点をおいた観察といえよう。実はこの1907年に日本の探検家日野強は中国本土から西行してコムルを通過し、漢城の西 500m を流れる西流の右岸にある回城は 1 辺が 700m の方形の土壁をめぐらし、その城内に哈密回部親王の邸宅があったと伝えている⁽⁵²⁾。1919年にコムルを訪れた林競は「回王城の中にはいて回民〔コムル人〕男子を見ると、欧人によく似ていて、かれらはトルコ族である」という印象を述べている。また、1916年にコムルを訪れ、王の召宴に出席した謝彬は「席中で回王は 2 度、淨処〔礼拝所か?〕へ行き、コーラン経を誦え、その様子は極めて敬虔であって、ムハンマドの魔力は実に大きい」と言い、別の宴席では「回王は飲酒せず、漢人の作った料理をとらず、自分の料理人の作った食事が出なければ宴席に出なかった。城内の礼拝堂では回王は毎日 5 回礼拝し、城内の回民も集って来て礼拝した」⁽⁵⁵⁾と伝えている。コムル回王が敬虔なイスラム君主として行動していたらしいことが知られる。

回城の傍らにコムル王家の先祖代々の墓所があることは陶保廉によってはじめて報告された。すなわち、「回城の北門（門の石額は蒙回 2 種の題字であった）の外へ出て半里、土橋を過ぎて半里のところ、道の左に亭があり、これは回王の祖墓であった（『辛卯侍行記』巻 6）」と伝え、日野強も同じ場所に回部王歴代の陵の存在を伝えている⁽⁵⁶⁾。林競はさらに詳しく観察した。——「回城を出て 1 里ばかりで、回王の先祖の墓蘆を訪ねた。その頂きは円く〔クッパ形〕、

笠を覆うたようである。墓〔廟〕の周囲は皆、琉璃の方磚で積み重ねられてあり、極めて宏麗である。聞くに、現在の王〔Shah Maqşūd〕の祖〔Bāshir〕がその先人の死を追憶するため、南路の職人と呼ばひ、20年がかりで完成したという。王の墓廬は北向きで、門が開いていた。門をはいると、碑が2基あり、回文〔アラブ文字〕を刻してあった。再び一つの門へはいると奥深い処で、やはり方磚で積み重ねられていた。その様式は長方で、上海の万国公墓に似ていた。外面は布で十数重に包んでいる。小墳が十余あり、話によると、王墳は二つで、即ち今王の祖父と父のものであり、その他は王后のものであるという。墓の傍らには歴代の王墳が七つあった。その後方に礼拝堂があり、大晦日に祈禱する所である。平時は城内の小礼拝堂で礼拝する⁽⁵⁷⁾と。林競は現コムル王 Shah Maqşūd の祖父と父の墓、歴代諸王と夫人の墓（地下に柩がある）、廟墓附属の礼拝堂2所、廟墓の門内にあった2基の石碑の存在を伝えている。謝彬もこの廟墓について同じような観察をしているが、「大きな墓は今王の祖と祖母のもの、父と母后及びその伯叔父母のもので、小さいのは同祖兄弟と同父兄弟のものである⁽⁵⁸⁾」ことを聴取したようである。

1929年コムルを訪れた劉文海は王宮について独自の観察をしている。——「王宮は回城のなかにある。回城の城門にはいると、そこはトルコの都市のように見える。円頂の宮殿の上に柱が立ち、その先端に新月の金属板がついている。それはコンスタンティノーブルのソフィア宮殿と異なるところがない。回王の陵園は回城北の西北方面にあり、城から約半里のところにある。なかに華麗な建物があり、面積は約6方丈、牆の高さは約6丈で、緑色玻璃の磚で作られており、円頂形でトルコ式宮殿であり、……内部には回王の柩が置かれて⁽⁵⁹⁾いる」と伝えている。これは円屋根を載せた廟墓の様式を描写したものであろう。実はこれら中国人旅行者よりも先に、すなわち1905年にすでに A. v. Le Coq はコムルを訪れ、Shah Maqşūd の *orda*（宮殿）の中にはいつて謁見した。A. v. Le Coq はコムル王家の廟墓とこれに付属する *masjid* をも観察した。かれはこの廟墓が

Altunluq Mazār と呼ばれていることを報告しており、また、*masjid* の入口の広間に置かれていた2基の石碑の存在を報告し、その碑文の解説研究を発表した。トルコ語碑文は Sayyid Muḥammad Bāshir が郡王位を受け、この *masjid* を建立したことを頌賛する内容で、1849/50年か1855年に建てられたと見られる。⁽⁶⁰⁾ この *masjid* に関して、1934年にコムルを訪れた Sven Hedin によると、「宮殿の近くにあったイスラム寺院は Khaltgha *masjid* と呼ばれていて、美しい礼拝堂があり、玄関には柱が立ち並んでいた。これは賽の目型の簡単な建物で、低い円天井があり、コムル歴代の王と王族たちが墓室の中に眠っている。室内には石棺に似た細長い碑が横わり、その下に地下の墓があることを示している」⁽⁶¹⁾と観察している。この見聞記はコムル王家の廟墓 (Altunluq Mazār) とその付属の *masjid* をまとめて記していて、全体としてはやや曖昧な記事であるが、この *masjid* の名を Khaltgha と記録したのは Sven Hedin の他にはないようである。

以上によって見ると、コムル回城 (Chong Qomul) の中にコムル王の *orda* (宮殿、王府) があり、回城の北門を出たところに王家の *mazār* (廟墓) があり、それは Altunluq Mazār と呼ばれていた。この *mazār* はクッパ型の建物、墳墓などより成っており、この *mazār* 付属の *masjid* は Khaltgha という名称を持っていた。また、この *mazār* の門内に2基の石碑があり、その一つは Bāshir がこの *masjid* を建てたことを記念するトルコ語碑文が刻されていた。また、コムルにはイスラムの制度と文化が見られ、中国人の観察者も漢族とは異なるトルコ=イスラム的なコムルの王家の存在を認識していた。ヨーロッパ人の観察は碑文資料の発見、イスラム文物とトルコ語原典の理解度という点で中国知識人の観察よりも一歩進んでいた。

3 コムル回王の権力

コムル公国の政治制度、とくにコムル王の持つ領主的性格、領民支配の実状は史料上からは Shah Maqṣūd (1881-1930) の時代につ

いて集中的に知ることができる。

まず、コムル王は莫大な牧場資産を所有していた。たとえば、「沁城の東約100余里の所を東山という。ここは草木が叢生し、禽獸が繁殖し、居民はみな、回部の纏種〔纏回の意〕であり、牧畜に従事し、水草の便を逐うている。……また、東方へ四站のところを渚毛湖といい、草廠が潤大で、孳生が繁く盛んである。回部に犯罪者があれば、この地に安住させ、全家をこの地に移住させ、生還できないことを示すのである。そのため、民はこれを苦牢のように恐れる⁽⁶²⁾」という。王が東山地区に罪人を移住させ、広大で豊饒な牧場において牧畜などの労役に服させたことは明らかである。また、別の報道によると、「東山地方は黄羊、雪鷄、鹿の細毛を産するので、山地民はその王に一定の歳貢を納めた。また、蘇拉滿 (Sulaiman) 孳生廠があり、大馬もまた強壯で、回部第一の牧場である。回王への貢馬も多くはここから選ばれる」といわれ、さらに、「東山は牛羊馬の特産地方で、ただ、回部の王がその利益を独占している」という⁽⁶³⁾。東山の山地民とはコムルの山地民 (Taghchi) であったと見られるが、かれらはコムル王に家畜を貢納として供出することを義務づけられていたのである。コムル王の家畜所有のことは他にも広く知られていて、「哈密王は20万頭の牛を所有し」(『新西域記』巻下)、「北方天山 (Barkul Tagh と Qarlīq Tagh か) に夥しい牛羊馬、駱駝などを牧養し、有数の富豪であった」(『同上』)と大谷探検隊員も報じている。東山の西約100里にあたる沁城はモンゴル語では塔勒納沁 (Tarnachin) と呼ばれ、トルコ語では塔什伯拉克 (Tash Bulaq) といい、これは石廟の意味といわれる (『辛卯侍行記』巻5)。Tarnachin は18世紀の初頭から清朝の屯田がおかれた地で、この屯田地の城塞が沁城 (Ch'in の城塞)⁽⁶⁴⁾ であった。明代にはこの地は Tash Balghasun と呼ばれていたが、現在は Qarlīq Tagh 東南麓の Tash Bulaq となっている。沁城は北は外モンゴル、東は安西、西はコムル、南は鎮西[?]と連絡する要地であり、とくに Qarlīq Tagh 北辺の土胡蘆 (Tughulu. トルコ語名は Attürük) は沁城と密接な関係にあった⁽⁶⁵⁾。

コムル王の専制権力については多くの情報はひとしく特記している。日本の探検家日野強は1907年にコムルの事情を観察し、「王爺（哈密回部親王）は纏回を嚴罰に処する。小さな犯罪は5尺の棒を以て打ち、大きな罪を犯した者は暗処の中にいれ、さらには流刑に、すなわち数百里外の砂漠の中で牧畜の苦役にあてる。さらに、かれは厳しく死刑を課した。⁽⁶⁶⁾王爺所有の羊は15万頭あり、主として流刑者を用いて牧畜させた」と、回王の専制君主としての圧政を伝えている。別の見聞によると、「王は資産が豊かで、羊10万余頭を所有していた。牛馬はそれぞれ1,000頭、駱駝は数十頭であった。歳収の田租を銀錢に変えて地下蔵に埋蔵し、その額は500万元であった⁽⁶⁷⁾」という。林競は Shah Maqşūd についてこう観察している。——「回王は12蘇木（*sumu*）の回民を直轄している。1蘇木は居民150戸よりなり、1人の長〔*dorgha* か〕を置く。かれらはすべて王の労役と納税にあたっている。王は生殺与奪の権を握り、重罪人は暗室に幽閉された。回民は王の圧迫に対して反抗したが、鎮圧された。しかし、かれらは常に不満を抱いている⁽⁶⁸⁾」と。橘瑞超によると、「哈密の親王ホジャムは部族を苛酷に統御したので、回族はこれに反抗している。かれは自分の属民に対して生殺与奪権と租税徴収権を持っていた。そして非常に富裕な生活をしていた。親王は東干の乱に際し、清朝に軍費を献じ、回匪の一首領を捕えて、支那政府から厚遇された⁽⁶⁹⁾」と伝えているのもコムル王の専制権をよく物語っている。さらに、謝彬は Shah Maqşūd について、「哈密の豊饒な土地は多くの回王の采地（土地は33,700畝）に属しているので、回人は富み、漢人は貧しい。回民は憶病、柔弱であり、上に事えるのに恭謹である。ゆえに、大工事をおこしたり、大事を挙行する際、かれらは財産、粟を供出して、走り行って上の者に奉仕する。かれらは後怨を恐れているようである⁽⁷⁰⁾」と、その権力について述べている。

コムル王権と法制については別の観察もある。——「コムル回王は扎薩克親王である。哈密県長は漢人と扎薩克親王に属しない回民及び蒙古人を管理する。回部民は回王に納税し、法律上の争いを陳

弁する。もし、回漢の紛争があれば、哈密県長もまた、告発された回民を回王に渡して処置させる。ただし、原告の回民もまた、国家の法廷に対して漢民を起訴する。清朝の地方政府に対して回王は軍隊及び大道往来の差役の費用を供給する義務がある。このほか、回王はその治下の回民に対し、生殺予奪を自由にしている。……今の〔1929年当時〕回王 Shah Maqşūd は性格が貪欲で、常に爪牙のベクたちを各地に派遣して搾取し、民は苦しんでいる。さらにかれの子〔聶滋爾〕も荒淫で、民間の婦女を求めて犯した。部民はみな、これを怨み、数年前、鉄木爾 (Timūr) なる者が反乱をおこしたが、鎮圧されて殺された。回王は感激して喜んだが、回民の生活はさらに圧迫され、苦しんだ。かれらは、漢人の官吏にも苦しめられ、古今中外を通して、これほど憐れな民はなかった⁽⁷¹⁾」と、中国人ながら、コムル王の専制権力について比較的、客観的な見方をしており、それは実情であったにちがいない。しかし、コムル王は清朝帝室や中国当局の庇護をうけていたために、コムル住民の抵抗は概して成功しなかった。

コムル人の *alban* (徭役) についての具体的な資料は参考に値する。すなわち、1892年に N. Th. Katanov がコムルにおいてひとりのコムル人情報提供者から聴取した口碑のなかに Qomul Wang の課した *alban* の実情がよく伝えられている。その要旨は以下のようである。——「Qomulluq *chantō*〔コムル纏頭〕は冬の3ヵ月間に21日間、王のために堆肥(糞)を積んだ車を運ぶ。かれらはこの仕事を無報酬で行なう。車を利用できない貧窮者は運送者に対して、冬に毎月、7日間、土を運搬する。Pu-zhung Khanīm〔夫人ハヌィム〕は1ヵ月に *dāhqan* (農民) たちを5日間働かせ、さらに土木工事をさせる。夫人はさらに穀物を刈らせる。王は夏に *bughu-dai* (小麦) が実ったときに、人々が夫人のために畑において10日刈りいれすれば、運がよい。また、人々が7日間で準備できれば、彼女は人々を自由にする。*alban* のために王が人々を駆り集めるとき、従事した労働には一片の麵包も、びた一文も与えられない。……」。「小麦以外のもの、たとえば *sorgo* (きび) を栽培するとき

は、関係者たちに税金として100束を納めるよう命令する。《某々は100束を持っている。これこれの男は50束の *sorgo* を王の Pu-zhung の家へ届けよ》と。「王是北京へ参観しなければならないので、かれはしばしば穀物を集める。王は1人の金持ちから1 *taghar* (約224 kg)、貧乏人から5 *kürä* (約112 kg) を取る。大金持ちから4 *taghar* を取る。自営農民から、かれは2 *taghar* を無償で取る⁽⁷²⁾」。これらは1892年におけるコムル人の証言として価値があるといえる。これらの口碑資料によると、コムル王（とくに Shah Ma-qşūd）が領民に対して苛酷な徭役（*alban*）を課し、物資運送、土木工事、収穫作業などに従事させ、広く強制労役を課していたことは明らかであり、コムル王の北京参観の際の旅行費用の一部を徴発していたことも知られ、王の夫人も同じような私用の *alban* を課していた。これらの事実はコムル王の専制領主的性格をよく示しているといつてよい。コムル人も回王の圧政にいつまでも堪えていたわけではなく、1907年に1,000人を越える民衆が回王に反抗の行動に出たが成功せず⁽⁷³⁾、1912年には鉄木爾（Timūr）というコムル人が回王に対して軍事的蜂起をしたが、烏魯木齊政府の楊增新の干渉によって、結局は鎮圧された⁽⁷⁴⁾。

結 び

17世紀の末にジュンガル王国からの侵略に直面したコムル住民の代表者 ‘Ubaid-Allah Bek（額貝都拉伯克）が清朝に臣従し、扎薩克の爵位を授与されて創り出されたのが哈密郡王であり、それは東トルキスタン最東部のトルコ=イスラム的地方政権であった。この政権は通称で Qomul Wang（コムル王）と呼ばれるが、その地位はいわゆる公国（principality, dukedom）にあたるといえよう。清朝は哈密王に特権的地位を与えることによって、これを新疆回部統治のための藩屏とした。ベク官人制の施行された新疆の各地区とは異なり、Qomul Wang はコムル地方の領民を直接支配する君主であった。清朝は回部の他の地区と同じく、コムルに行政・軍事の統治機関を駐在させたが、原則としてコムル住民の生活には干渉しなかつ

た。‘Ubaid-Allah Bek は清朝の新疆統治政策上の所産であって、かれ自身の出自に神聖権ないし王権の裏づけがあったという明らかな証跡に欠ける。歴代の Qomul Wang (郡王。のちに親王位) はイスラム王公として清朝帝室の庇護のわくの中で領主権力を行使でき、領民に対するあらゆる専権が可能であった。この政権ではイスラム制度が維持され、それによってコムル人の民族性が保たれ、19世紀以降の外国人旅行家の眼には、コムル公国が中国本土に隣接したトルコ=イスラム社会の小世界として映った。しかし、コムル王に対する住民の反抗運動もやがておこらざるを得なかった。

註

- (1) 『親征平定朔漠方略』巻6；『聖祖実録』巻156，康熙31・8戊申，甘肅提督孫思克疏。
- (2) 『辛卯侍行記』巻6の記事もほぼ同じであるが、紅柳園の次に沙泉水をおいている。
- (3) コムルを支配したトルファン-ハン家のハン，スルタンについては，佐口透『新疆民族史研究』東京，1986年，pp. 135-139参照。
- (4) 『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻108，「哈密総伝」。佐口透『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』東京，1963年，pp. 19-24を参照。
- (5) Тенишев, Э. Р. “Уйгурская эпиграфика Синьцзяна”，Алма-Ата，1969. 佐口透「新疆（東トルキスタン）のイスラム——その寺院と廟墓——」『摂大学術』Ser. B, No. 7 (1989), pp. 79-89に引用されている。
- (6) Le Coq, A. v. *Volkskundliches aus Ost-Turkistan*, Berlin, 1916, p. 67に Wāpā とある。
- (7) 佐口透 1986，第II部を参照。pp. 139-140。
- (8) 註(5)を参照。
- (9) 佐口透 1963，pp. 103-192に詳しい。
- (10) 佐口透 1986，pp. 161-170。
- (11) Pelliot, P. *Le Hōja et le Sayyid Husain de l'Histoire des Ming*, Leiden, pp. 130-133. 永元(小田)寿典「明初の哈密王家について——成祖のコムル経営——」『東洋史研究』22-1 (1963), pp. 1-38。
- (12) 文中の「卑」は不明確である。bī かあるいは衍字か。
- (13) Le Coq, A. v. “Erzählung des in Kutscha ansässigen Qomulluq Seifullah”，*Keleti Szemle*, Vol. 18 (1918-19), p. 81, 87. (Le Coq, 1918

- 19 と略称する)。
- (14) 文中の天山は Barkul Tagh を指すものと見られる。
- (15) 『欽定新疆識略』巻3。
- (16) Mannerheim, C. G. *Across Asia from West to Asia in 1906-1908*, I, Oosterhout, 1969 (reprint after the first edition of 1940), pp. 388-389. I-koshuor は一果樹か？
- (17) 陶保廉『辛卯侍行記』巻6。
- (18) Le Coq, A. v. 1918-19 (“Seifullah”), p. 88.
- (19) Mekrit については、和田清「セ克力考」『東亜史論叢（蒙古篇）』東京、1959年、pp. 855-865を参照。
- (20) 謝彬『新疆遊記』上海、1923年、p. 84。
- (21) Oda, Juten. “Uighuristan”, *Acta Asiatica. Bulletin of the Institute of Eastern Culture*, No. 23, Tokyo, 1978, p. 39.
- (22) P. Pelliot 1948はこの *su-mu* の語義は不明であるという。
- (23) Le Coq, A. v. 1918-19, p. 87.
- (24) 同上。
- (25) Katanov, N. Th. *Volkskundliche Texte aus Ost-Türkistan aus dem Nachlass von N. Th. Katanov* herausgegeben von Dr. Karl Menges, II, Berlin, 1933, pp. 54-56. 佐口透 1989, p. 94参照。
- (26) 『林則徐集 日記』中山大学歴史系、中国近代現代史教研組、研究室編。北京、1962年、pp. 426-429。
- (27) 『辛卯侍行記』巻6。
- (28) 『哈密直隸州郷土志』（片岡一忠編、『林出賢次郎将来新疆郷土志三十種』京都、1986年刊）、p. 66。
- (29) Mannerheim, C. G. 1940, p. 391.
- (30) 『穆宗実録』巻120, 同治3・11丙午。コムル王は *Mämläkät Wang* (国王) の称号をも持っていた。Le Coq, A. v. 1916, p. 67 参照。
- (31) 『辛卯侍行記』巻6。『穆宗実録』巻255, 同治8・8甲午。
- (32) Грум-Гржимайло, Г. Е. Описание путешествия в западный Китай, том I, С.-Пт, 1896, p. 466.
- (33) 『辛卯侍行記』巻6。『穆宗実録』巻361, 同治12・12辛卯。
- (34) Грум-Гржимайло, Г. Е. 1896, pp. 472-473.
- (35) 『德宗実録』巻149, 光緒8・7戊戌。
- (36) Younghusband, F. E. *The heart of a continent*, London, 1896 (邦訳：水口志計夫訳、ヤングハズバンド『カラコムルを越えて』角川文庫、1968年)。

- (37) Грум-Гржимайло, Г. Е. 1896, p. 473.
- (38) Le Coq, A. v. *Buried treasures of Chinese Turkestan*. Translated by Anna Barwell, London, 1928, p. 104.
- (39) 『新西域記』上巻, p. 388. Le Coq, A. v. 1918-9, p. 100.
- (40) Mannerheim, C. G. 1940, pp. 381-382.
- (41) 『新西域記』下巻, 1912, p. 795.
- (42) 『新西域記』下巻, 1912, p. 602.
- (43) 林競『西北叢論』上編：日記三四，両巻，上海，1933年，p. 231.
- (44) 謝彬『新疆遊記』，1923 p. 78. Maqṣūd は1856年ころの生まれであろう。
- (45) Hedin, Sven. *Auf grosser Fahrt*, Leipzig, 1940 (ヘディン中央アジア探検紀行全集 6, ゴビ砂漠横断, p. 324)。
- (46) Hedin, Sven. *Die Flucht der grossen Pferde*, Leipzig, 1940 (ヘディン, 中央アジア探検紀行全集 8, 戦乱の西域を行く, 東京, 1965年, p. 47)。
- (47) 馮有真『新疆視察記』上海, 1934 (民国23) 年, p. 139.
- (48) Грум-Гржимайло, Г. Е. 1896, pp. 491-492.
- (49) 『辛卯侍行記』巻 6。
- (50) Mannerheim, C. G. 1940, p. 388.
- (51) Mannerheim, C. G. 1940, p. 387. コムル回城の写真として, C. G. Mannerheim (1940) ; 『新西域記』(1912) ; D. Carruthers, *Unknown Mongolia. A record of travel and expedition in North-West Mongolia and Dzungaria*, Vol. II, London, 1914 ; A. v. Le Coq (1916, 1926), 劉文海『西行見聞記』(1933), 林競『西北叢編』(1933), S. Hedin (1928, 1934) などに図版があり, 城門・城壁, 宮殿, 廟, 墓, 寺院, 市街, 軍隊, 人物などの写真として史料的价值がある。
- (52) 日野強『伊犁紀行』上巻, 1909年, p. 142.
- (53) 林競『西北叢編』p. 232.
- (54) 謝彬『新疆遊記』p. 79.
- (55) 同上, pp. 79-80.
- (56) 日野強, 前掲書, p. 151.
- (57) 林競『西北叢編』pp. 232-233.
- (58) 謝彬『新疆遊記』pp. 78-79.
- (59) 劉文海『西行見聞記』南京, 1933年, p. 233.
- (60) Le Coq, A. v. 1928, p. 132. 佐口透 1989, p. 93.
- (61) 註(46)による。

- (60) Le Coq, A. v. 1928, p. 132. 佐口透 1989, p. 93.
- (61) 註(46)による。
- (62) 『哈密直隸州郷土志』 p. 63.
- (63) 同上。
- (64) Oda, J. 1978, p. 39.
- (65) 楊增新『補過齋文牘』癸集, 民国 8 年12月16日の記事。『西北叢編』 p. 226. Taghliq の住地の自然環境については D. Carruthers 1914 の記事がある。このなかに記す Uturuk は Attürük のことである。
- (66) 日野強『伊犁紀行』上巻, p. 143.
- (67) 『西北叢編』 p. 231.
- (68) 『西北叢編』 p. 230.
- (69) 『新西域記』下巻, p. 795.
- (70) 謝彬『新疆遊記』 p. 82.
- (71) 劉文海『西行見聞記』 pp. 194-195.
- (72) Katanov, N. Th. 1933, pp. 17-19.
- (73) 片岡一忠「新疆省における辛亥革命」『大阪教育大学, 歴史研究』第15号 (1978年 3 月), p. 36 に, 包爾漢「哈密維吾爾農奴起義」によるとして引用されている記事による。包爾漢『新疆五十年』北京, 1984年, pp. 20-27 にも記事がある。
- (74) 包爾漢『新疆五十年』北京, 1984年, pp. 20-27, 「哈密鉄木耳起義」などによる。なお, 1930年代のコムルの反乱については新免康「新疆コムルのムスリム反乱 (1931-32年) について」『東洋学報』70-3・4 (1989), pp. 105-135がある。

〔後記〕 本稿を提出したのち, 岡田英弘・宮脇淳子両氏の御教示により, 東京大学図書館蔵の殿版『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻108, 「哈密総伝」を複写によって閲読することができたことを両氏に感謝する。実はこの部分は『国朝耨猷類徴初編』巻首に収められている当該『王公表伝』では欠落しているものである。なお, これに関して宮脇淳子「祁韻士纂修『欽定外藩蒙古回部王公表伝』考」, 『東方学』No. 81 (1991), pp. 102-115を参照。なお, 『王公表伝』の「哈密総伝」によると, 「哈密旧城」と「哈密新城」の名が明記されているので, 本稿 pp. 2-3, p. 6への補記としたい。

